

第12 国際日本学コンソーシアム 「壁をこえる」

2017年12月11・12日 日本文学部会 於 お茶の水女子大学

向こうからの声たちと小説をこえて

—いとうせいこう『想像ラジオ』と木村友祐『イサの氾濫』において—

パリ・ディドロ大学大学院生

杉江 扶美子

この発表では、2011年の東日本大震災によって露わにされた現代の様々な「壁」をこえる試みとして、いとうせいこうの『想像ラジオ』と木村友祐の『イサの氾濫』について考察する。

『想像ラジオ』は、月刊「文藝」2013年春号に掲載後すぐに単行本化され、第149回芥川賞と第26回三島由紀夫賞候補になり、第35回野間文芸新人賞を受賞している。作品は、並行して語られる二つの話から成っている。一つは、津波におそわれた東北のある町で杉の木に引っかかったまま、想像力によってしか受信できないラジオ番組を発信するDJアークによって語られる。この「想像ラジオ」は、死にきれずに魂がこの世に残ったままの人たちの声である。もう一つの話は、仲間と被災地のボランティアに出かけている作家Sが語り手である。Sは現地で耳にした話から「樹上の人」のイメージに取りつかれ、声を聴こうとするが聴こえない。死者の言葉を想像することの是非について、仲間たちと議論が展開される。

『イサの氾濫』は月刊「すばる」2011年12月号に掲載後、第25回三島由紀夫賞候補となり、5年後の2016年3月に『埋み火』と併せて単行本化されている。主人公の将司は東京の生活になじみず、故郷八戸に帰る。会ったことのない、乱暴者で故郷を追われて行方不明の叔父・勇雄の話聞き、小説にしようと思いつく。なぜか震災の少し前から「イサのじちゃん」が将司の夢に現れるようになり、イサは将司の意識、青森から福島まで無数の「まづろわぬ^{ふと}人」「東北人」の意識を集めながら大群となり、東京へ「^{さが}叫べええっ！ さあがあべえええっ……！」と氾濫・反乱していくイメージにつながっていく。

この二作品に共通しているのは、震災後の小説に見られるディストピア的な暗澹とした印象からは遠く、重い主題を見た目は軽く描いていること、そして、聞こえない声を聴こうとし、見えないことを視ようとする作家の姿が描かれていることである。そこには、死者と生者、東北と東京、個人と社会、作者と読者、言葉と現実などを隔てる壁をこえていくような力がある。木村朗子は『震災後文学論 新しい日本文学のために』（青土社、2013年11月）の終わりに、震災で作家が直面した困難として「言論の壁」「タブー」の存在を指摘している。いとうせいこうや木村友祐の小説では、原発問題、死者の言葉、東北の搾取構造など、タブー視されがちな主題がどのように語られ、死者と生者、東北と東京、作者と読者を隔てる壁がどのように表現されているか。現実をとらえる新たな視野と視座を示唆することがフィクションの意義だとしたら、ここでの新たな視点や想像力とは、どのように定義されるだろうか。『想像ラジオ』や『イサの氾濫』からは実際のラジオ番組や音楽バンドが生まれているが、狭義の小説空間をこえていく過程とその価値はどのようなものであるか。また、最も重要な課題として、作者の書く行為のみならず読者の読む行為に対して、どのような倫理的態度と責任がありうるのか、若干の考察を試みたい。